

家から海へ

白浜で出会った生きものたち

37

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

沖縄はサンゴの楽園

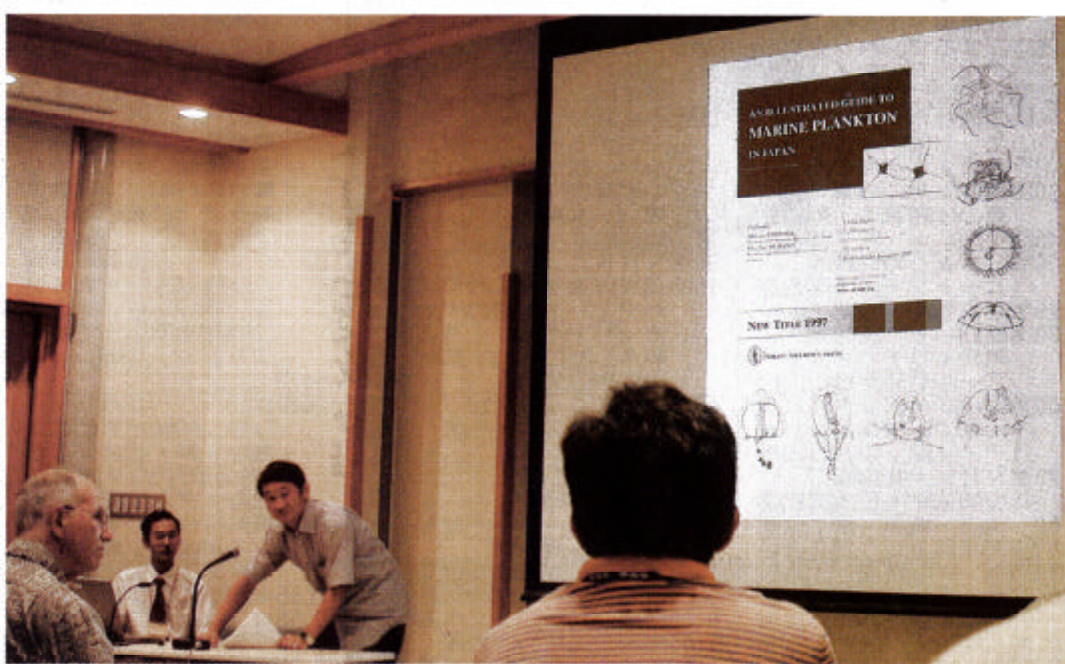
4年ごとに開催される国際さんご礁学会に6月27日から1週間出席して来た。全世界から1300人余の参加があった。前回はバリ島で開催されたのだが、今回は沖縄島野の研究者が大勢いて、なので10年余り前から実施している南西諸島のクラゲ類の研究調査も兼ねて参加した。また学会ではこの研究テーマで講演した。

余りが記録されており、大西洋の約50種と比べる。サンゴは上へ上へと成長を続けるので、さんご礁のみが輪状になって残る。

さんご礁といえは、進化論で有名なダーウインがさんご礁の形成と変遷に関する卓見を世に出している。これは沈降説と、呼ばれるもので、島が沈んでなくなってしまう沈降現象とさんご礁の発達を関連づけたものだ。円すい状の島が沈んでいくと、島をちぢめるよ

国際さんご礁学会に思う

は石垣島と西表島の間で飛んだ。紺べきの海の準備のミニチュア版といふに出て美しいさんご礁。続いてクラゲ類の



国際さんご礁学会(第10回)で南西諸島のヒドロクラゲ類を图示しながら講演中の筆者(左から3人目)一今原幸光氏撮影

海藻やクラゲ類、巻貝類、ウミウシ類、魚類などの生態、形態、生活史、生殖、分布など、いろいろな分野にまたがる多彩な生物群に関する講演が朝から夕方まで毎日ひっきりなしにあつて退屈しなかつた。残念ながら白浜周辺で調査中のウミカメ類やイルカ・クジラ類

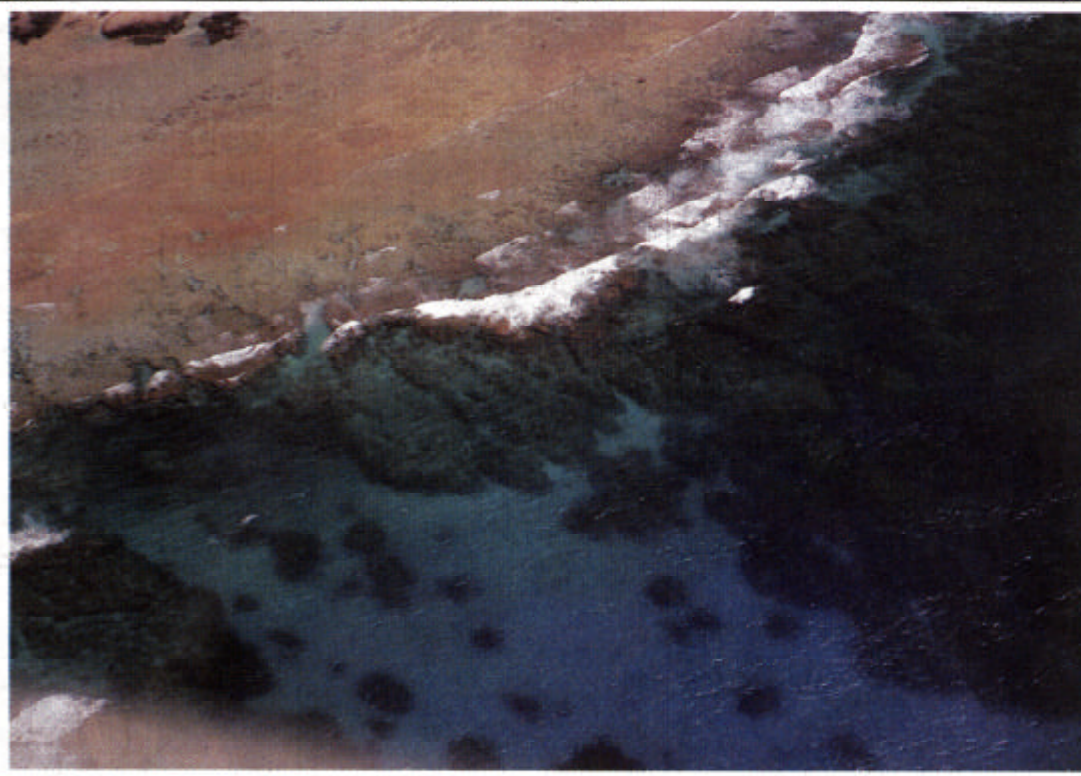
うにできているさんご礁でもさんご礁は同様の形(楕円形)と状態の変遷をたどる。わが国ではさんご礁は南西諸島のみでしか発達できず、種子島が北限とされている。造礁サンゴ自体は黒潮流域の北限にあたる千葉県沿岸まで分布し、田辺湾周辺でも55種余りが記録されている。

空から那覇付近と慶良間に採取された丸いルカン。調査ポイントの1拠点と間列島のさんご礁を観察。ここした阿嘉島を含む慶良間列島の上空を巡回する。



南西諸島にのみ分布する猛毒のハブクラゲの模型、毒の強い触手が電気仕掛けで赤々と輝くように仕込まれている(美ら海水族館で)

学会終了後に出版されるシンポジウム集は、今回はインターネット公開が予定されていると聞いた。



航空機を活用した巡検中に撮影した那覇沖合のさんご礁(裾礁)